

もののけ(ヤンデレ)姫

トマホーク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ジブリの名作、もののけ姫に登場するアシタカヒコに転生した主人公がヤンデレ要素が過分に付与された世界で自らの運命に抗いながらヤンデレっ娘達とあれやこれやするお話です。

※以前に投稿した作品の改訂版です※

※改訂後、投稿を忘れていたのでとりあえず投稿します※

目次

新たな日々	1
タタリ神、来襲	5
名譽の負傷	14
会合	25
準備	28
旅立ち	33
道中	40
胡散臭い鼻デカジジイ	48
未知との遭遇	53
山越え	58
閑話 ヤンデレ出陣	65

新たな日々

……どうしてこうなった？

家の近所にある農業高校を卒業した後、林業関係の仕事に就き、20歳の時に狩猟と猟銃の免許を取ってから10年。

30歳になって、ようやく念願のライフル銃を取得出来たからウキウキで狩猟に出たら……。

化物みたいな大きさのイノシシに遭遇して両足をへし折られ、ライフルの暴発で土手っ腹に大穴が空いて、しかもそんな瀕死の状態で這いずりながら助けを求めていたら突然現れた白い野犬に喉笛を食い千切られて死にました。

……いや、死にましたという言葉は語弊があるな。

実際は気が付いたら何故か赤子になったし。

ナニコレ!?これが俗に言う転生という奴なのか!?

なんて事を考えていた時から早15年。

俺は昔の日本?で山奥に隠れ住む蝦夷(エミシ)とか言う一族の若長——アシタカヒコとして生きてます。

しかし、どうせ転生するなら魔法があるファンタジーな世界とか知っている漫画やアニメの世界とかが良かったなあ。

……まあ、この世界も単なる昔の日本じゃないみたいだけどね。

だって、やたらめつたらデカイ獣の化物みたいなのとか、骸骨みたいなお小さい妖精？ 精霊？ が普通にいるし。

精霊モドキは無害（いや、たまに死にそうになるイタズラを仕掛けてきたりするけれど）だからいいけど、村をちよくちよく襲撃してくる化物共はなんとかならんのかね。追い払っても傷を癒してまた来るから一々命懸けで倒さないといけないし。

というか、そんな化物とかよりも野盗がウザイ。

この前なんて刀とか槍を持った落武者風の奴らが30人ぐらいで村を襲ってきた上に、俺の婚約者であるカヤを拐いやがったし。

まあ、すぐに奪還したけど。

ちなみに野盗は弓で射殺しました。

村の場所を知った者は生かして帰してはならぬ!!とか村のジジイ共に言われた事もあって。

一応、他にも仲間が居ないかとか聞く用に捕らえた奴が一人居たけど、色々な事を聞くだけ聞いた後、ジジイ共があっさり殺してた。

この世界は命の価値がとても低いです（棒）

ま、そんな感じで割りど物騒な世界に転生した俺は、前世で培った技能や知識を生かして何とか暮らしている訳です。

「兄様（あにさま）。私は何度も言いましたよね？アヤとサヤに色目を使つてはいけな
と」

さてと、現実逃避はこれぐらいにして、今まさに直面している危機をどうするか考えようか。

「兄様？私の話を聞いていますか？」

「はい、聞いてます」

「……何か別の事を考えていませんか？」

「考えてません。すいません」

何でこんな事になつてるんだらう。

カヤといつも一緒にいるアヤとサヤとちよつと喋つていただけなのに。

ただそれだけに、激おこな婚約者のカヤに説教されている。

というか、カヤの目に光が全くなって怖い。

誰か、助けて。

ちよつと前までは清纯で素直な子だったのに……今ではヤンデレみたいになつてる

よ。

いや、以前から兄様兄様って子犬みたいに擦り寄ってくる子だったけども。野盗に拐われた一件の後から、俺に対する執着心や依存心が強くなった気が。

これはどうしたら――

「兄様？ やっぱり他の事を考えてますよね」

とりあえず……ごめんなさい。

夕夕り神、来襲

はあ、昨日は酷い目にあつた。カヤの奴最近どんどん独占欲強くなつてるんだよな……このまま順調に事が進んで結婚したら完全に尻に敷かれるな、こりや。

つて……あれ？

ヤツクルに乗つて狩りに行くか村の畑でも耕そうと思つたんだが……今日の山はやけに静かだな。

いや、静か過ぎる？ちよつと婆さんの所に行くか。

「婆さんッ！」

「アシタカヒコや、お前も気が付いたかい？」

という訳で村を影で支配していると云つても過言ではない老巫女の婆さん——ヒイ（様）婆の元にやつて来たのだが。

ヒイ婆も山の異変に気が付いたらしい。

「ああ、山がおかしい」

崖の中腹から張り出した岩の下に作られた神社から険しい顔で周辺の山々を見つめるヒイ婆の隣に並び立つ。

「ここに来るまでに耳をすませたりしていたが鳥や虫の鳴き声一つしない。いや、それどころか木々のざわめきすらない。耳の痛くなるような静寂。こんな事、前世はもちろん今までの今世でも無かった。

「何か良からぬ物の気配がするね。アシタカヒコや、一つ頼まれてくれるかい？ 村の外に出ている皆を急ぎ呼び戻しておくれ」

「分かった。じゃあ念のため村の男達にはボウガン——じゃなかった弩(ど)や連弩を持たせて各陣地につくように言っといてくれ」

何かを見極めるように森を睨みながら、頼み事を口にするヒイ婆にそう返せばヒイ婆はこちらに視線を向けて露骨に嫌な顔をした。

「あれは……あまり使うべきじゃないんだがねえ」

「自然との調和が壊れる。だろ？ だから狩りには使わずに有事の時しか使つてないんだ。勘弁してくれ」

「分かったよ。しかし、お前は荒事になるとやつぱり頼りになるねえ。私らが思いも付かないような事ばかり思い付くし。流星は鬼の子」

「誇るような、からかうような顔をしてそうのたまうヒイ婆に今度は俺が苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる事となった。

「……」

村を發展させようと前世の知識を使って色々とはっちゃけていた時の渾名を出すな。若干煙たがられていた時期もあるから気が滅入るんだよ。

というか、外敵対策として前世で蓄えていたミリオタの知識でブービートラップのキルゾーンや対戦車陣地モドキを構築したり、林業の仕事で培ったもの作りの技能を利用して弩や色々な武器、便利な農具や工具を作って何が悪い。

……あ、駄目だ。

前世の知識が無い奴らから見たら異端だわ。軽く絶望しながらも神社の入り口に立て掛けてある木板に視線を走らせる。

この木板には村や畑、山などといった場所が書かれた枠と村人達の名前が刻まれた札が掛けられており、それらを組み合わせる事で誰が今どこにいるのかを簡単に知ることが出来るようになっていた。

「えつと……出札によると見張り役以外で村の外に出ているのは15人か」

おいおい、カヤ達3人も外に出ているじゃないか。

これは急がないと。いつものように山菜採りに出ているならすぐ近くには居ない可能性があるからな。

「その出札も外に出ている者が一目で分かるようにと、お前さんが作った物だが……こういう時には便利だねえ」

しみじみしてないで村の男に指示だしてこいよ、ヒイ婆。少し焦りながら外に出ている人員の確認をしている俺とは打って変わって落ち着いているヒイ婆の姿に毒気を抜かれてしまう。

「村の方は任せたぞ、婆さん!!」

「ああ、任せておき」

とりあえず何があるか分からないしフル装備で出るか。人数の確認を終えた俺は気を取り直し、後をヒイ婆に任せると神社を後にした。

「ヤツクル、今日も頼むぞ」

さて、急がないと。

ヒイ婆と別れてから一度家に戻り武器と装備を整えた俺は厩舎にいた相棒——大カモシカのヤツクルの背に股がり、村の外に出ている皆に異変を伝えるべく村を飛び出した。

さつき畑に居た村の奴に聞いたらこつちの方で見掛けたって言うていたが、カヤ達は

どこに……。

畑に出ていた村人達に声を掛け終わり、残すはカヤ達3人だけとなった時点で手に入れた目撃情報を頼りに村外れにヤツクルを走らせる。

見つけた!!

3人とも一緒か。

石垣に挟まれた通路をヤツクルと共に駆けていると前方から小走りで走ってくるカヤ達を視界に捕らえる事が出来た。

「カヤ!!」

「兄様!!」

走らせていたヤツクルの手綱を締めて減速させるとカヤ達が側まで駆け寄って来る。

「山の様子がおかしい。すぐに村へ戻るんだ」

「ジイジもそう言うの、山がおかしいって」

「鳥達がいらないの」

「獣達も」

3人の無事な姿にホッと胸を撫で下ろした俺が村へ戻るように言えば、カヤ、アヤ、サヤの3人がそれぞれにそう言い募る。

こちらが異変を伝えるよりも先にカヤ達は村外れにある見張り櫓に居た村のジイ

に村へ帰るように促されていたようだ。

「ジジイもそう言っているのか？なら尚更急いで村へ。俺はジジイの所へ行ってくる」
胸の前で両手を握り締め不安げな表情のカヤにそう告げる。

「はい、兄様」

「よし、いい子だ」

こういう時は素直でいい子なんだがな。ご褒美になでなでしてやろう。跨がるヤツクルの上から手を伸ばすと、こちらの意図に気が付いて被っていた帽子を脱ぎ頭を差し出してきたカヤの頭を撫でてやる。

「兄様……」

こうやって頭を撫でてやると、嬉しそうな顔を見せてくれるし。

少しでも安心させようと思いついて笑みをこぼしながらカヤを構い、そしてカヤを撫で終わると最後にアヤとサヤにも気を配る。

「アヤとサヤも気を付けるんだぞ」

「はい!!」

元気な返事をしたアヤとサヤも帽子を脱いでいたのでカヤと同じように軽く頭を撫でてやる。

「……兄様、後でお仕置きです」

何故に!?

「行こう、2人とも」

思わず息を飲むようなカヤの表情にヒツと息を飲んでみると、最後にこちらを一睨みしていったカヤがクスクスと笑うアヤとサヤの手を引いて村の方へ走って行った。

カヤが、カヤが……昏い笑みを浮かべていた。

これは2時間コースだな。

つと、今はそれよりもジジイがいる見張り櫓に行かないと。

夜に行われるであろうお仕置きのことを考えると震えの止まらない足に活を入れ、お仕置きの時にお前も一緒に居てくれるか?と問い掛けたヤツクルに無視を決め込まれつつも俺は見張り櫓へと急いだ。

「爺さん!!無事か!」

「アシタカか」

村と外の境界線近くにある崖上の見張り櫓に到着しヤツクルから飛び降り、猿のように櫓をよじ登って行くと頂上の見張り台では見張り役である村のジジイが険しい顔で山の方を見つめていた。

「山の様子は——」

「ッ、何か来る!!」

山の様子を聞こうとした瞬間、ジジイが鋭い声をあげ落ち着かせていた腰を浮かせた。

もうかよ!? 見張り櫓に登ったばっかりだぞ!!

弓で殺せる相手ならいいんだが。

息つく暇もなく櫓の上で弓に矢をつがえ、迫る気配の方角に狙いを定めながらそれが出てくるのを待つ。

「出た!! タタリ神じゃ!!」

まさに嵐の前の静寂の後、侵入者を阻む石垣を突き破りながら森の中から怒涛の勢いで形容し難い異形が飛び出してくる。

「タタリ神?」

黒紫のような毒々しい色の触手染みた器官を身体中にまとわりつかせ、また2つの大きなギョロ目で辺りを睥睨しつつ、地面を抉り取るように腐食させながら歩を進める化物は増えたり減ったりする足を器用に動かしながらこちらへ向かって来ていた。

何か森や土が腐ってるぞ!?

あの触手の塊が腐らせ——うえ……日光に当たったら触手が弾けた。

しかも、中からドス〇アングみたいなイノシシが出てきた。

あ、またくつついた。気持ち悪い……。

日陰から日向に出た途端に胎動していた黒い触手状のモノが弾けたように空に打ち上がったかと思えば、触手の中から立派な凶体の大イノシシが姿を現した。

って、こつちに来るな!!

だがそれも束の間の事。再び触手が大イノシシの体にまとわりついたかと思うと、こちらに向かつて遮二無二に突っ込んで来る。

あ、ヤベエ!! 櫓の下にヤツクルを待たせたままだった!!

ヤツクルを見張り櫓の下に待たせていた事を思い出し、俺は慌てて下を覗き込むのであった。

名譽の負傷

「クソツ、逃げろヤツクル!!」

突進してくるタタリ神の姿に体毛を総毛立たせながら恐怖で立ち竦むヤツクル。慌てて逃げるように声を張り上げるが、恐怖で声すらも聞こえていないようであった。

「シツ!!」

このままではヤツクルの身が危ないと判断した俺は見張り櫓の手摺から身を乗り出しヤツクルの側にあつた櫓の柱に、射るタイミングを逃してつがえたままであつた矢を射る。

カツンツと柱に矢が命中した音で我に返つたのか、ヤツクルはタタリ神の突進を受ける寸前に身を翻して脱兎の如く駆け出して行く。

「危なかつ——」

ホツとしたのも束の間。寸での所でヤツクルを逃したせいなのかタタリ神は進路を変更せず直進し、そのまま見張り櫓を支える柱に体当たりを食らわせた。

嘘だろ!?

体当たりの衝撃に揺れる見張り櫓の手摺を咄嗟に握り締める。次いでミシミシミ

シツと木が軋み割れていく音を耳にして思わずジジイと顔を見合わせ、お互いに青ざめさせる。

不味いと思つた時にはもう遅く、タタリ神の体当たりを受けた衝撃によつて根本をへし折られた見張り櫓はゆっくりと後ろに傾いて行く。

しかも不幸な事に見張り櫓の背後は崖であつた

「うおおおおおおおッ!」

「く、崩れるぞお!!」

ヤバイ!!櫓が倒れる!!クソツ、脱出!!

「つ……イテテ。爺さん、大丈夫か!」

あつぶねー、倒れていく櫓からジジイ抱き抱えてジャンプして間一髪脱出出来た。木の上に飛び込んだから大丈夫だったけど飛んだ先が地面なら死んでたぞ。

「ああ、大丈夫じゃ。お前さんが咄嗟にワシを抱えて飛んでくれたお陰でなんとかのう。櫓はものの見事にバラバラじゃが」

咄嗟に飛び込んだ木の枝の上で窮地を脱した事に安堵の息を漏らす、バラバラになつてしまつた見張り櫓の事を思うとフツフツと怒りが沸いてくる。

あの野郎……よくもやってくれやがったな!!この見張り櫓作るの大変だったんだぞ!!それを土台からぶつ壊しやがって!!

この恨み、晴らさずおく——って、あの野郎!!

村の方に向かってやがる!!村を襲う気か!?

「ジジイはここにいろ!!」

「アシタカツ!?何をやる気じゃ!!」

村の方へ進んで行くタタリ神の後ろ姿を視認した俺は木の上から飛び降りるとジジイを置き去りにして崖を掛け登った。

「ヤツクル!!」

タタリ神から逃れる為に、一時的に側を離れていたヤツクルを声とピーツと鳴らした口笛で呼び寄せる。

村はやらせん!!って……ええい、クソツ!!

呼ばれた事を理解して駆け寄ってくるヤツクルの姿を横目に自身の装備の確認を試みれば弓の弦が切れているし、矢筒に入れてた矢も落下の衝撃であらかた折れていた。

弦自体は予備のモノですぐに張り直せるが……無事な矢は3本だけか。

この3本だけで、あの化物をやれるか?

まあ、無理ならブービートラップのキルゾーンに引き込んで足止めしつつ、村の男衆と一緒に矢をしこたま撃ち込んでぶっ殺すか。

そんな風に思考を巡らせながらも弓の弦を張り直し、自身の元にやって来たヤツクルに飛び乗る。

「よし、ヤツクル行け!!」

「アシタカー!!タタリ神に手を出すな!!呪いを貰うぞ!!」

ヤツクルに跨がり乗り駆け出した俺にジジイが声を掛けてきた。

呪いって、うえ……そんな能力まであんのか、あの化物。

厄介な。ま、大丈夫だろ。

遠距離武器だけで仕留めるつもりだし。

というか、四の五の言ってる暇は無い。今もヤツクルを走らせているが中身がイノシ
ンなだけあってヤツの移動速度が早い。

このままだとすぐに村に到達してしまう。

ジジイの警告に警戒レベルを一段引き上げながらも手綱を弛める事なくタタリ神の
追跡を続けた。

「っ、いた!!」

森の中を駆け抜けタタリ神に追い付き目前にその姿を捉える。

間近で見ると余計にデカく感じるな。

それにキモイし臭い。

鼻が曲がりそうな腐敗臭だ。

……念のため警告だけしとくか。

「止まれー!!止まらんと撃つ!!」

『……』

森の中を至近距離で並走しつつ、俺はタタリ神に対して声を張り上げる。

だが、タタリ神はこれっぽっちも気にした様子はなかった。

「さぞ名のある山の主と見たが、何故そのように荒ぶり我が村を襲う!」

『……』

ガン無視かよ。

こちらの声にはピクリとも反応せずタタリ神はただ猛然と村に向けて進んで行く。

この世界の獣達はたまに人語を理解するんだが……特にデカイのは。こいつは無理か。

まあ、こんな様子だしな。駆除一択だな。

さて、このまま引き付けて村の西にあるキルゾーンに誘導するか。

警告を諦め、討伐の為にタタリ神をキルゾーンに誘引しようとした時であった。

「ほら、付いてこい——つて!?!」

言った側から違う方に行くんじゃないやねえ!!

木々の切れ間から開けた土地に出た途端にタタリ神が急停止し、突如右に90度方向転換。

「っ!?!」

マズイ!!カヤ達に狙いをつけやがった!!

更に厄介な事に変更した進路上に偶然にも居たカヤ達3人に狙いを定めた。

「何あれ!?!」

「お化け!?!」

「村ヘツ!?!」

明らかな敵意を剥き出しにしてカヤ達に迫るタタリ神。その姿に驚きながらも村に向かつて全力で走るカヤ達。

その光景を目の当たりにし、このままではカヤ達にタタリ神が追い付いてしまうと思いやつクルの手綱を操りタタリ神の前に出て進路を妨害する。

「やめろ!?!こつちに来い!?!」

しかし、タタリ神は目前でうろうろと進路を阻み挑発行動を行う俺の事など眼中になく何故か逃げるカヤ達だけを狙い走り続ける。

「あう!?!」

「っ!?!」

カヤとアヤが転けた!?

そうしてなんとかタタリ神の気を引こうと俺が無駄な努力をしていた時であった。草に滑ったのか石に躓いたのかは定かではないが、カヤとアヤの2人が同じタイミングで転んでしまう。

クソ、ここで仕留めるしかない!!

けど触手が邪魔で急所が狙えねえ!!

なら……唯一露出している目玉しかないか!!

転んだまま立ち上がれないカヤとアヤ、そして持っていた山鉈を咄嗟に引き抜き構えて2人を守ろうとするサヤ。

そんな3人の姿に俺は一か八かの大勝負に出る。

激しく揺れ動くヤツクルの背の上で覚悟を決めて弓を引き矢の狙いをつけた。

「食らえ!!」

『プギヤアアアアアッ!』

日々の練習とこれまでの狩りの経験のお陰で見事にタタリ神の目玉に矢が命中したが……これ、不味くない?

うげっ!?!触手が荒ぶりでした!?

ヤツクルをタタリ神の顔前にまで近付け、至近距離からの射撃を成功させてホツとし

たのも束の間。

行き足を止めて痛みに悶え縮こまっていたタタリ神の触手がハリセンボンのトゲのように四方八方にバツと突き出たかと思うと次の瞬間には触手が一本化して鞭のようになりながら俺に襲い掛かって来た。

「兄様!?!」

「行けえ!!カヤ!!コイツは俺が引き付ける!!」

格好をつけたのはいいが、触手が来る!?

囷となるべくカヤ達とは真逆の方向にヤツクルを走らせると怒り狂ったタタリ神の触手が空中を蛇のように蠢きながら猛然と追い掛けて来た。

牽制に矢を放つがタタリ神は気にする様子すらない。

ヤバイヤバイヤバイ!!触手が伸びて来た!!

追い付かれ——

「ガッ!?!」

右手がツ……クソ!!

一瞬で間合いを詰めて来た触手の予想外の早さに驚く暇もなく、右腕が触手に絡め取られた。

「邪魔だ!!」

ヤツクルを走らせながら腕をひねって無理矢理に触手を引き千切り、矢をつがえてタタリ神と相對する。

……っ、好機!!

触手が伸びて本体から離れたお陰で止めが刺せる!!

遠距離攻撃に触手を使用した為に体に纏う触手が枯渇し大イノシンの姿を現したタタリ神を見て歯を食いしばりながら俺は笑みを浮かべる。

「畜生が!!くたばれ!!」

『じギイイイイ!!』

痛みをこらえつつヤツクルを反転させ、距離を詰めながら必殺の間合いでタタリ神に最後の矢を放つ。

命中ツ!!手応えあり!!

脳天を射ぬかれたタタリ神が大きな音と共に倒れ込んだ。

「しっかし、いつてえ……」

それを見届けた俺は落馬するようにヤツクルから降りると、負傷し熱を持つ右腕に持っていた竹の水筒の水をぶっかけた。

仕留めたはいいが……代償もデカイなこりや。

腕がクツソ痛い。

出来る限りの応急処置を行いながら傷の様子を伺う。

つてか、なにこれ。酸？硫酸的な何か？

服が溶け落ちたんですけど？

というか、痛すぎ……ッ!!

ま、まあ、カヤ達を守れたからいいけど。あと、村も。

とりあえずの応急処置を終えた俺は達成感に浸りながら心配そうに顔を擦り寄せてくるヤツクルの鼻先を撫でていた。

「兄様!!」

「アシタカツ!!無事か!!」

「アシタカが手傷を負ったぞ!!ヒイ様を早く!!」

そうこうしているうちに武装した村の衆やカヤ達が俺の元にやって来る。

「ああ……そんな……兄様が……兄様が」

カヤ、そんなに取り乱すんじゃない。すぐに死ぬような傷じゃないんだから、多分。

……ハンパなく痛いけど。

「カヤ、この傷に触れるなよ。ただの傷じゃないみたいだ」

「私の、私のせいで、兄様が兄様が……いやあ……いやあ!!」

「……」

うん。聞いてないね、この子。

婆さん早く来て!!

傷の手当てよりも先に錯乱したカヤを宥めて欲しいと思ひヒイ婆の到着を心から願うのであった。

会合

来襲したタタリ神の大イノシンを倒した日の夜。

神社の社の中、俺の正面ではヒイ婆が石を転がしてまじないを行い、その傍らには村長衆の面々が沈痛な面持ちで座っていた。

「さて、困った事になった……。かの猪ははるか西の国からやつて来た。深手の毒に氣ふれ体は腐り、走る走るうちに呪いを集めタタリ神になってしまったようだ。アシタカヒコや。皆に右腕の傷を見せておやり」

重苦しい空気が辺りに漂う中、ヒイ婆の言う通りに右手に巻いていた包帯を巻き取り皆に傷の様子を見せる。

「ツツ」

「ヒイ様……ツ!!」

痛々しく、また禍々しい痣が刻まれた傷の様子を見た村長衆の面々は目を伏せたり、さすがのようにヒイ婆に問い掛けていた。

「アシタカヒコや。お前には自分の定めを見定める覚悟はあるかい？」

「ああ、タタリ神を射る時に覚悟は決めた」

村長衆の問い掛けには答えずに発せられたヒイ婆の問いに俺は間を置かずに答える。

「うん。そのアザはやがて骨まで届きお前を殺すだろう」

「ヒイ様!! なんとかありませんか!?!」

「アシタカは乙女らを守り村を守ったのですぞ!!」

「ただ死を待つというのは……ッ!!」

飄々と言つてのけたヒイ婆の言葉に、ああやつぱりなと薄々悟つていた事実を俺が受け入れていると、突然の死の宣告に反発するように村長衆が声を荒らげる。

「誰にも定めを変えられない。だがただ待つか自ら赴くのかは決められる。見なさい。あの猪の体に食い込んでいた物だよ。骨を砕き腸を引き裂き惨い苦しみを与えたんだ。さもなければあのような猪がタタリ神などになるものか」

今がいつの時代かは知らないけど、もう火縄銃とかあるのかな? にしてもこの弾丸デカいな……。

ヒイ婆が着ていた服の袖口から取り出した鈍い光を放つ鉛玉を見ながら俺はそんな事を考えていた。

「西の国で何か不吉な事が起こっているのだよ。その地に赴き曇りの無い眼で物事を見定めるなら、あるいはその呪いを断つ道が見付かるかもしれない」

西の国、西の国。この里が東北地方にあるからどこまで行けばいいんだ?

まあ、ヒイ婆が言う事だし座して死を待つよりはワンチャン解呪出来るかもしれない可能性に賭けるか。

「ヤマトとの戦に敗れ、この地に潜んでから五百幾余年。今やヤマトの王の力は無い。將軍共の牙も折れたと聞く。だが我が一族の血もまた衰えた。この時に一族の長となるべき若者が西へ旅立つのは定めかもしれない」

旅立つ決意を俺が固めたのとは同時に村長衆の中でも長老の立場にある長爺の言葉が場を締めくくった。

「掟に従い見送らぬ、健やかにあれ」

頭の上でお団子に纏めていた髪の毛を小刀で切り落とし遺髪として祭壇に奉り一礼した後、ヒイ婆からの別れの言葉を受けるとヒイ婆にも一礼し俺は神社を後にした。

準備

住み慣れた村の中を自分の家に向かって歩きながら俺は先程まで行われていた会合の事をポーっと思いつ返していた。

はあ……やっぱりこうなつたか。

この傷——呪いを受けた時に大体予想はついていたけどさ。まあ、呪い持ちが村に居るのは宜しくないしな。

当然か。

しかし、物事を曇り無き眼で物事を見定めろつて言われてもなあ……。

それに西の国か……どこまで行けばいいのやら。

とりあえず荷物を纏めるか。

「あ、兄様」

「うん？アヤか」

会合の内容を思い返し今後の身の振り方について、漠然と考えを巡らせていると自宅の少し前の曲がり角でアヤと擦れ違つた。

「ヒイ様達とのお話はもう終わったのですか？」

「ああ、まあな。……カヤの様子はどうか？」

そう言いつつ天真爛漫な笑みを浮かべるアヤに俺は笑みを返しながらそう言った。タタリ神を仕留めた時は取り乱して話も出来ない状態だったのが。

「今は落ち着いています」

「そうか。足を挫いたと聞いたが、そっちは？」

「軽く捻っただけみたいですから2〜3日で治るみたいです」

なら良かった。それにしても野盗に拐われたりタタリ神の前で転けたりとカヤはドジっ子属性でも持っているのか？

「そうか。なら大丈夫だな。で、アヤはどうだ？何ともないか？」

「私……ですか？私は何ともないですけど」

「お前さんは何かと表に出さないからな。ちゃんと聞いて確認しておかないと心配なんだ」

野盗にカヤが拐われた時に、野盗に斬り掛かられて受けた小さな切り傷を隠してたし。

あの傷、小さかったとは言え放つといたら化膿してたぞ。

病院も薬品も無いこの世界じゃ、ちよつとの怪我でも命取りだったのに。

「わっ!?!……もう、こんな事するからカヤが焼きもちを焼くんですよ？」

お前さんの頭を撫でてるだけですわ？」

「これぐらいで焼きもちなんか焼かんだろ」

「……唐変木」

何かちっちゃい声で言われた。まあ、こんな規模の小さい村にいたら自分より年下の子達なんか全員弟か妹みたいなものだしな。カヤも姉妹同然のアヤに焼きもちなんか焼かないだろ。

「あ、そうそう。カヤが兄様の顔が見たい見たいって頻りに言ってきましたから、後でカヤの所に行つてあげてくださいいな？」

「……」

あーそれは……出来ないな。

「兄様？」

表情を曇らせて視線を落とした俺の顔をアヤが首を傾げて覗き込んでくる。

「そうしてやりたいのは山々なんだが……そうもいかんだ」

「どうしてですか？」

「今夜中に村を出ていかなければいけなくなつてな。その準備がある」

「え!? どういう事ですか!?!」

「どういう事つて、そりゃあ……まあ、うん。いろいろあつてだな」

言えねえ……呪いのせいで出ていかないといけないなんて。

「……呪いのせいですか？」

濁した所をズバツと切り込んでくるんじゃないよ。

「あー……ま、そんな所だ。カヤには言うなよ？」

「兄様が……村から居なくなるなんて……そんな」

アヤさん？

おーい、聞いてます？

「で、話を元に戻すが顔を会わせりゃヒイ婆達との話も聞かれるだろう？」

「黙っていたら——」

「あいつは勘が鋭いから隠し通せる気がしない」

アヤやサヤを構っていたりすると絶対に来るしな。

山奥だろうと。

……何で場所が分かるんだろ。白眼でも持つてんのかな？

「そうですね。カヤは兄様の事となると凄いですから」

「……ホントにな。でだ、その時に俺が村を出るなんて言った日にはカヤが付いて来か

ねん」

「でも……最後に一目ぐらい……」

「残念だが、このままカヤが何も知らない内に——ッ!？」

「どうかしましたか？ 兄様」

「……いや、何でもない」

何だったんだ、今の刺すような視線は。

背筋に氷柱でも突き刺されたような凄まじい悪寒を感じた俺は辺りを見渡すも、その原因を発見出来なかつた為アヤへと視線を戻す。

そのせいで少し離れた家の影から月明かりを浴びて爛々と輝く2つの光点の存在にはついで気が付く事が無かつたのだつた。

旅立ち

よし……もうみんな眠つただろう。

さあて。生まれ育つた故郷に別れを告げますか。

村人達が皆寝静まつた頃を見計らい、旅装束に身を包んだ俺は慣れ親しんだ我が家を後にする。

「ヤツクル、おいで」

お前さんには悪いが、俺の旅路に付き合ってもらうぞ。

厩舎で干し草を食んでいたヤツクルを静かに連れ出した俺はヤツクルに跨がると、手綱を操り村の出入り口へと向かう。

「とりあえずタタリ神の来た道を辿つて行く——おいおい……」

何でカヤが荷物を持って村の正門前に居るんだ。

……凄く思い詰めてる顔してるんだが。

一先ずタタリ神がここまでやって来た痕跡を辿りながら西の国を目指そうと決めヤツクルの手綱を打とうとした瞬間、村の門の柱の影から旅装束を身に纏い荷物を背負ったカヤが行く手を遮るように現れた。

「兄様」

「……カヤ。こんな夜更けにどうした？その荷物は？」

旅仕度万全のカヤの様子からしてもう事情を知ってる様だが一縷の希望に賭けて、とりあえずすつとぼけてみる。

「……アヤから全部聞き（出し）ました」

アヤさーん？何でバラしてるんだよ!?口止めしただろ!?

「なら尚更何故？見送りは禁じられているはずだぞ」

「見送りじゃありません。私は兄様に付いていきます。元はと言えば私が転けたせいなんですし」

オウ………案の定かよ。

頭の隅でもしかしたらと危惧していた事が現実のものとなり、頭を抱えなくなるがグツと我慢してカヤと対峙する。

「カヤ………この呪いを受けたのはお前のせいじゃない」

「いえ、私のせいです。だから……絶対が付いていきます」

「いや、だから……」

「私のせいでないとしても付いていきます」

「……」

はあ……どうすつかな。

こうなるとカヤは絶対に折れないからなあ。

……あんまり気乗りしないが、しようがない。

とりあえず正攻法で説得してみて、それが駄目なら少々きつめの言葉を掛けて諦めさせるか。

頑ななカヤの様子にどう説き伏せるかと思考を巡らせながら俺は内心でため息を吐いたあと、再び口火を切った。

「いいか、呪いの件は別としてもだ。お前はまだ幼い。そんなお前を宛の無い旅路に連れていくのは無理だ」

「邪魔になればその時に私を捨てて下さい。この身、この命、兄様に捧げます!!」
何か怖いこと言い出したよ、この子。

さも当然の事のように命を差し出してでも付いて来ようとするカヤの姿に気圧されながらも俺は言葉を紡ぐ。

「……分かった。はつきり言おう、お前は足手まといだ。だからここで捨てていく」
「ツ!!」

うっ、そんな傷付いた顔をしないでくれ。

ああ、もう泣くな泣くな。

「それでも!!私はず!!」

意識してキツイ言葉を投げ掛けたのにも関わらず、目に涙を浮かべながらも決意を曲げようとしないうちに俺はほとほと困り果てていた。

……折れてくれないか。

どうすつか——おい、ババア。

隠れて見てんじやねえぞ!!

そんな時であった。ふと視線をカヤからずらして何気なく見れば側の家屋の影からヒイ婆が野次馬根性丸出しでこちらを覗いている事に気が付く。

つてか、見つかったんなら隠れる素振りぐらいしろ!!

開き直って嬉々として顔を出して来るな——村人みんな見てる!?

視線が重なって慌てて隠れるのかと思いきや、ニヤリといやらしい笑みを浮かべて先ほども会話を盗み聞きしやすいようにズイツと身を乗り出してくるヒイ婆の図太さに怒りを爆発させようとした寸前、そこかしこの影という影から全村人達がこちらを隠れ見ているという事実気が付く。

こんちくしょう、見せもんじやねえんだぞ!!

殺気立ちながら処す? 処す? と呟く若人衆と苦笑しながらそれを押さえていてくれる男衆、若いって良いわねと溢す女衆、温かい目で酒を煽りながら黙って事の成り

行きを見守るご隠居衆、互いの手を握り緊張した面持ちで息を飲み一部始終を注視するアヤとサヤ。

そんな面々の視線を一身に受けて呆れるやら怒りやらで俺は空を仰ぐのであった。「アシタカヒコや、連れていっておやり」

とうとう出てきたよ、このババア。

「……掟はどうした婆さん。見送らないんじや無かつたのか？」

「良い意味でも悪い意味でも、これまで村の掟を悉く破ってきたお前さんにだけは言われたくないねえ」

「……」

倫理観と意識改革の悪弊だな、こりや。

誰の仕業で村がこんなに大所帯になっているんだと思うんだい？と続けながらジト目で睨んでくるヒイ婆に思わず視線を反らす。

「この子はお前を好いているんだ。そんな子を——」

「だからこそだ。大事なカヤをこの先俺一人で護りきれる保証がない」

「……そうかい」

「兄……様」

誰が慕ってくれている子の不幸を望むか。

俺の強い語気にヒイ婆はやれやれと首を振り、カヤは大事なカヤという言葉を目に
て泣き止む。

「カヤ、もう諦めなさい。アシタカヒコはお前の事を想って言っているのだよ？ お前も
好いた男を困らせたくはないだろう」

「でも、ヒイ様。……………分かりました」

ヒイ婆に抱き締められ、あやすように頭を撫でられたカヤは項垂れながら旅路への同
行を諦めるのであった。

なんとか折れてくれたか。

「なら、せめてこれを私の代わりにお供させて下さい」

なんとか収束した事態にホツと胸を撫で下ろしているとヒイ婆の抱擁を抜け出した
カヤが小走りに走り寄り、荷物の中から何かを取り出す。

「これは…………お前が大切にしている玉の小刀じゃないか」

「兄様をお守りするよう息を吹き込みました。いつもいつもカヤは兄様を想っていま
す。きつと、きつと!! (いつか兄様の元へ参ります!!)」

「そうか、ありがとう。元気でな」

何かカヤの言葉に含みがあるような気がしつつもカヤから小刀を受け取り、下ろして
いた頭巾の頬当てをあげ、未練を振り切るように俺はヤツクルの手綱を打った。

「兄様ーッ!!」

ああ、チクシヨウ!!

失恋? から始まる旅路なんて最悪だよ、全く。

そうして俺はカヤの声と村人全員の視線を背に住み慣れた故郷に別れを告げるのであつた。

道中

嘘だろ……一昨日の大雨のせいか、ここまで辿って来たタタリ神の痕跡が無くなって
いる。

里に別れを告げてから約2ヶ月。ヤツクルと共に道無き道を進みタタリ神が残した
痕跡を辿って山を越え川を渡り森を抜けと過酷な旅を続けていたのだが、深い森に覆わ
れた山脈を抜けた先の大河に辿り着いた際、タタリ神の痕跡が忽然と消えてしまった事
で俺は決断を迫られる事となった。

困ったな。数少ない手掛かりが早速1つ無くなったぞ。

残りの手掛かりなんて、西に行けって事だけだし。

さて、どうしたものか。

……………うん。しょうがないな。ここからは人里に降りて情報収集するか。

今まで最大限面倒事を避ける為に人里には近寄っていなかったが、こうなってしまう
た以上仕方ないしな。

思えば人と話すのも久し振りだな。

タタリ神の移動の痕跡が消えてしまった以上、旅を続けるために必要な情報を得るに

は今まで避けていた他の人間との接触が不可避であると判断した俺は人との久し振りの会話を楽しみにつつヤツクルの手綱を人里へと向けるのであった。

「ええー……うわあ……戦してるよ」

しかし、山奥の開けた平地に作られた人里に辿り着いた俺の期待はすぐに打ち砕かれる事となった。何故ならば眼前の人里で激しい合戦が勃発していたからである。

おいおい。

色々期待して人里に来たはいいけど、こりゃあ情報収集どころじゃないぞ。

巻き込まれない内に通り返けるか。

「——居たぞ!!兜首だー!!」

「勝負、勝負!!」

面倒事を避けるために情報収集は違う場所でしょうと思い、コソコソと逃げようとしていた俺の背後から足軽達の大声が響き渡った。

言った側からこれかよ。

というか、頭巾と兜を見間違えるなよ。

チツ、撃つてきやがった!!

「ヤツクル、GO!!」

興奮しているのか、よく確認もせずに矢を射ってきた足軽の矢をかわしながら内心で

悪態を吐きヤツクルを走らせる。

逃げるが勝ちだ。とつとつとずらからう。

襲ってくる足軽達をあしらひながら戦場から離脱するべく逃げ逃げとヤツクルと共に人里の外縁を進んで行く。

その道中、水田の畦道を通つて逃げて来る百姓達の姿が視界に入る。

運が良かった者は命からがら山の中へと逃げ込み、運が悪かった者は追つ手に追いつかれ瞬く間に槍で貫かれ刀で切られ矢で射抜かれていく。

「チツ。胸糞悪いな、おい」

農民を……無抵抗の女まで殺す気か、あいつら。

そんな戦場の風景を横目に先を急いでいたのだが、進路上で粗末な鎧を身に付けた足軽が大量の荷物を背負つてヨタヨタと逃げてゐる恰幅のいい女性を背後から日本刀で切りつけている光景を目の当たりにして流石に何もしいない訳にもいなくなつた。

気に食わんな。弓矢で天誅してやろう。

「やめろーッ!!」

背負っている荷物ごと何度も切り付けられ、あと少しで刃が体に届くという絶体絶命の危機にある女性を助けようと俺が矢をつがえた時だった。

ッ!?!何だ!?!

弓矢を構えたら右腕が暴れッ!?

痣のある右腕が突然脈動し、俺の意思とは関係なしに矢に込める力を強めていく。

ぐっ、クソツタレ!!

予期せぬ事態に取り乱し、正確な狙いも定めきれぬ間に俺は矢を放つ。

「ぎゃっ!」

そしていつも以上に威力が込められ放たれた矢はまるで意思を持っているかのように、女性を襲っていた足軽の頭に命中した。

「何だ、この腕は……ッ」

右腕がいきなり暴れ出して手元が狂ったせいで、足軽の腕を狙ったのに頭に当たっちゃった。

しかも、矢が頭に刺さるだけじゃなくて頭がぶっ飛んだぞ。

デュラハン状態になった足軽と襲われていた女性の間をすり抜け、チラリと背後を振り替えればようやくやく頭無し足軽の足軽が地面に倒れ込む瞬間であった。

もしかしなくても……呪いのせいかな?

異常な威力を誇った矢の一撃。

その原因はなんであろうかと思えば、思い当たる節はただ一つしかなかった。

「逃がさぬぞー!!」

クソツ、新手か。弓騎兵が2騎。
腕の事は後回しだ。

「押し通るツ!!邪魔するなー!!」

違和感の残る右腕を押さえながら新手の弓騎兵に向け叫ぶが、返答は矢が飛んでくる。

危ぶねえんだよ!!

飛んできた矢の軌道を見切り、首を僅かに傾けて矢をかわす。

この野郎ツ、死ね!!

「命中!!」

問答無用の攻撃に応射すれば先ほど矢を射ってきた先頭の弓騎兵の頭が血飛沫と共に弾け飛ぶ。

また頭がぶっ飛んだな。

その光景を見て後続の1騎はスピードを落として追撃を諦める様であった。

「逃げ切れたか……」

はくやれやれ。

追っ手の姿が見えなくなった俺は距離を取ってから手綱を操りヤツクルの速度を落とす。

そして、念のため警戒状態は維持しつつも騎上からヤツクルの体に傷がないか確かめていた。

さて、もう戦場は抜けただろうけどなるべく早く別の所に行くか。

……いや、ちよつと待てよ。

「ヤツクル、お前は森で待つてくれ」

この時代の金持つてないし、ヤツクル1人だけに負担掛けるのもあれだし、手頃な足軽とか武将を数人狩って金と足を奪うか。

……最早、野盗だな。

戦場から離れヤツクルの無事を確認し足早に先を急ごうとした俺だったが、これは色々と補給するチャンスなのでは？と、ふと思いつきヤツクルから下りると自嘲しつつもゲスな笑みを浮かべ戦場へと舞い戻るのであった。

「待たせたな、ヤツクル」

ちゃんと待つてくれたか。

お前はやつぱり利口だな。ちやつかり沢を見付けて水飲んでるし。

「この馬達2頭もこれからの旅路の仲間だ。仲良くしてやつてくれよ」

返り血を浴びつつも大量の戦利品を獲得してきた俺の姿を見てヤツクルがドン引きしたように嘶くの尻目に俺はあらためてモノを確かめる。

馬2頭にお金っぽいモノと刀と矢と、その他もろもろ。かなりの収穫だったな。

うーん……荷物も増えたからリヤカーでも作って馬に曳かせるか？

いや、ダメだな。山奥じやリヤカーなんて使えないし。

道の整備されていないこの世界じゃ、使える場面が限られる。

当初の予定通り荷馬として使うか。

「つ、そーいや腕がおかしいんだった」

ホクホク顔で戦利品を検品した俺は忘れかけていた右腕の事を思い出し、沢へと向かう。

とりあえず水で冷して薬草でも貼っとくか。

「……う？痣が……濃くなってる？」

この前より明らかに濃くなっているんだが……うーん、あれか。マンガ的なあれか。

力を与える代わりに宿主？の命を削る的な。そう考えるとさっきの戦いの時の異常な力の説明はつくが。

……これってリアル中2病じゃないか？いや、邪気眼か？

くそつ、静まれ俺の腕よ!!とか言えばいいのかな？

まあ何にせよ……荒事の時には便利だけど、考えて使わないと痣が身体中に回って旅の途中で死ぬんじゃないかな、これ。

まるで何かの物語の主人公みたいな力だな等と他人事のように考えながら俺は痣に薬草をペタペタと張り付けるのであった。

胡散臭い鼻デカジジイ

瘧の考察を終え手当てをした後、旅路を再開し多くの人々で賑わう市場を見付けた俺は食糧の補給や分捕り品の転売、情報の収集を行おうとしたのだが、分捕り品の転売で多くの資金を得た事と故郷の旅装束が目立つたために移動しても自分の周りに人だかりが出来てしまうので、補給はそこそこに情報の収集は諦め市場を後にしたのであったが。

「いやー礼などとは申さん。礼を申すのは拙僧の方でな——」

さつきから何なんだろうな、この胡散臭いオツサンは。

ついさつき立ち寄った市で分捕り品を転売中に馴れ馴れしく話し掛けてきたかと思えば、口先三寸で転売品の値を釣り上げてくれたのはありがたいが、デカイ声で騒ぎながらやるもんだから余計なモノまで釣り上げやがった。

そう思いながらチラリと後ろを見やれば、良からぬ事を企みながら後をつけてきている3人の男女が確認出来た。

「——寝込みを襲われてもつまらん。走るか？」

あつ、オツサンが逃げた。

視線を前に戻したと同時に高下駄にも関わらず軽快なスピードでオツサンが走って行く。

うーん。何か氣勢が削がれたし、俺も逃げとくか。

「行くか、ヤツクル。太郎（馬）と次郎（馬）もちゃんとして来いよ」

何かされる前に先手を打って追跡者を排除しても良かったが、あまりにやり過ぎると指名手配されそうなのとオツサンの見事なまでの遁走に引き摺られ今回は逃げる事にしたのであった。

ふむ。で……何で俺はこのオツサンと一緒に飯を食う事になってんだ？

まあ、いいか。情報収集の一環と考えれば。

夜。人目を避けて野營の準備を整えた俺とオツサンは夕飯の支度をしていた。

「ほう、イノシシがタタリ神になったか」

「足跡を辿って来たんだが、大河に降りた途端分からなくなってしまったな」

粥が煮えるのを待つ間、旅の理由を聞かれた俺は里に関する情報をあやふやにしながらオツサンに答えていた。

「そりゃあそうだろう。そこらを見なさい。この前来た時にはここにもそれなりの村があったのだが……洪水でな。さぞ沢山死んだろうに」

……道理で家の残骸が転がっているわけだ。

「というか、そんな場所で飯を食おうなんて言うなよ。もっといい場所ぐらいあるだろ。」

「……まあ、人が来ないという点では一番良いかもしれないが。」

「戦、行き倒れ病に飢え。人界は怨みを飲んで死んだ亡者で犇めいとる。タタリと言うなら、この世はタタリそのもの……うん。うまい」

「おつ、味噌か。いいな。」

「オツサンが完成した粥に味噌を加えたのを見て俄然食欲が湧いてくる。」

「しかし、人里に降りたのは間違いだつた。降りてすぐに面倒事に巻き込まれてしまったしな」

「やれやれと首を振っている俺を見てオツサンが苦笑する。」

「はははっ、いやしかしな、その面倒事にお主が関わってくれたお陰で拙僧は助かった。ほれ、椀を出しなさい。まずは食わねば。……ほう……雅な椀だな」

「いい匂いだ。うん、旨い。やっぱり味噌はいいな。」

「つて、オツサン食い過ぎ。」

「味噌はあんたのだが、米は俺のだぞ。」

「よそわれた粥を口にしてふとオツサンを見れば既に一杯目を食べきり自分の椀に二杯目をよそっているところであつた。」

「しかし、そなたを見ていると古い書物に伝わる古の民を思い出す。東の果てに赤シシに跨がり石の鎌を使う勇壮なエミシの一族ありとな」

お互いにガツガツと粥にがつついてる最中、オッサンが何気なしに漏らした言葉に思わず反応しそうになるが平静を保ち、粥を口に掻き込み終えてから話を逸らすように自分の胸元をまさぐる。

「つと、そうそう。これに見覚えは？」

このオッサンただ者じゃないな。ならこれも知ってる可能性はあるか。

この時代、教養がある人間が少数派であり学ぶという事すら困難であるはずにも関わらず、歴史の間に埋もれ消え去ったはずのエミシの民の存在を知る事が出来たオッサンに俺は警戒心を強めていた。

「これは？」

「タタリ神と成り果てたイノシシの体から出て来たモノだ」

「ふむ。これは知らぬが……これより更に西へ西へと進むと、山奥のその山奥に人を寄せ付けぬ深い森がある。シシ神の森だ。そこでは獣は皆大きく、太古のままに生きてると聞いた。お主に呪いを掛けたイノシシはそこに住んでいたのではないか？」

「……シシ神の森」

思わぬ情報が手に入ったな。とりあえずそこへ行ってみるか。

……しかし、このオツサン。情報伝達の手段が乏しいこの時代の人間にしてはやけに色々と知ってるんだよな。

エミシの民の事も知ってたし、かなり厄介な人物なのかもしれないな。

警戒はしておくか。ま、もう会う事も無いだろうが。

未知との遭遇

雨、止まないな。

胡散臭いオツサンから入手した情報を頼りに寄り道もしつつ歩くこと約2ヶ月。

そろそろシシ神の森と呼ばれる地域に踏み入ろうとしていたのだが、突然の豪雨で足踏みを余儀なくされていた。

「さて、とりあえず聞いた感じだと今日か明日にはタタラ場とやらに着くか」

木の下で脚を休める太郎と次郎にも予備の籠を掛け、自身は急造のシェルターを作つて体温の維持に努めながら目的地までのおおよその道のりを計算する。

一先ずの行き先はシシ神の森であったが、そのシシ神の森のど真ん中にタタラ場という製鉄業を生業とする村があるという情報を寄り道の最中に追加で得ていた為、その村を指していた。

「……？」

雷鳴？いや、銃声かこれ。

不意にピンつと耳を立て辺りを警戒し出したヤツクルに釣られて耳を澄ませてみると、雨音に紛れて微かだが火薬が爆ぜる音が耳朶に届く。

やっぱりタタラ場がこれの生産元らしいな。だが何故こんな天気なのに撃ってるんだ？なんか獣にでも襲われたのかな？

ダーンッ！ダーンッ！と散発的な銃声を耳にしながらタタリ神の腹を食い破った鉛弾を右手でコロコロと弄び、銃声の度に僅かに胎動する痣を左手で押さえる。

そうしている内に銃声は聞こえなくなり、それから暫くして雨も止んだので移動を再開した。

「全く……酷い雨だったな。どこから流れ——つておい」

さっきの銃声が関係してるのか？

森を抜け大雨の影響で濁流が流れる川に出くわし、どこを渡ろうかと川の流れを見ていると牛と人の死体が上流から流れて来る。

「あつ、おい。大丈夫か!？」

流れていく死体に釣られて視線を下流に向けた後、上流の方を見てみれば瀕死の状態の男が1人すぐ側の岸に流れ着いているのを見つけた。

「うう……」

「よし、まだ生きてる」

ヤックルから飛び降り男が生きているのを確かめ慌てて川から引きずり出す。

「頑張れよ、助けてやるからな」

まだ他にもいるんじゃないだろうな。

そう思い辺りを見渡して見ればすぐ近くで岩と岩の間に挟まっているもう1人の生存者を発見する事が出来た。

さてと。怪我の具合は——血の匂い？なんか他にもいるなこりや。

そうして2人を安全な場所に引き摺り上げ応急手当をしようと思った時だった。

ヤツクルとほぼ同時に何かの存在の気配を嗅ぎとつた俺は2人に予備の簍を被せると頭巾の面当てを引き上げ、警戒しながら川縁の岩々を伝って上流へと登って行く。

ここら辺に——いたッ!!

濃くなる血の匂いと大きくなる何かの存在の気配に警戒心を一段と強めた時であった。

大きな岩に引つ掛かって積み上がった木の根の隙間の向こうにその姿を捉えた。

デカイ!!体長何メートルだよあれ!!

まず目に飛び込んできたのは対岸の川岸に打ち上げられた状態で地面に倒れ伏す巨大な白い山犬の威容であった。

2頭増えた!!それに女の子!?

それなりに距離があるにも関わらず、一目見てその大きさが分かるほど巨大な山犬の姿に驚いていると比較的小さいがそれでも十分大きな山犬が2頭も現れた事に更に驚

嘆する。

だが、その3頭の事よりも後から新たに現れた2頭の内1頭の背に女の子が騎乗しているのを目の当たりにして絶句する事となった。

あの3頭は親子か？まさかあれがシシ神の森の主なのか？しかし、あの女の子は一体……。

頭に幾つもの疑問符を浮かばせながら木の根の間から気配を消して様子を伺っていると女の子が大きな山犬に駆け寄る。

それに呼応するように大きな山犬が身を起こすと右前足付近の白い毛が鮮血に染まっていた。

あの傷……そうか、さっきの銃声はあの山犬に対してか。

大きな山犬の傷を視界に捉え、少し前に聞こえていた銃声の理由を臆気に理解する。

その一方で大きな山犬に駆け寄った女の子は銃創に気が付くと何の躊躇いもなく屈みながら傷口に頭を突っ込み、傷から流れ出る血を口で吸い出し始める。

あ、ヤバイ!!バレた!!

女の子が口一杯に血を含み、顔が血で汚れるのも厭わずに2回ほど傷口から血を吐き出した時であった。

女の子の処置にされるがままであった大きな山犬が俺の存在に気が付き唸り声を上

げる。

ちようど3回目の血を口にしていた女の子も大きな山犬の動きに気が付いて振り返り、俺の存在を認識すると警戒した面持ちで立ち上がり血を吐き出し口を拭う。

とりあえず挨拶だな。

完全に存在がバレてしまった事もあり俺は隠れ見えていた木の上に登って山犬達と少女の視界に身を晒す。

「我が名はアシタカ!! 訳あって東の果てよりこの地に来た!! そなた達はこのシシ神の森に住まう古い神か!!」

「……去れ!!」

こちらの問い掛けに数瞬の間を挟んだ後、まず大きな山犬がのそのそと森の中へと姿を消しそれに続いて小さい方の片割れに騎乗した少女がただ一言そう叫んで森へと消えていく。

最後に残った山犬が流れ着いていた牛の死骸を啜えて引き摺りながら森へ入り、そうして彼女達は俺の前から姿を消すのであった。

山越え

「ひゃあああああああッ!!」

「ッ!?!」

こちらの言葉には応じず去れとだけ言つて消えてしまった少女の姿をただ呆然と見送つた直後、怪我人を置いてきた辺りから聞こえた悲鳴にハッと我に返り来た道を駆け戻る。

「どうした!!」

「あ……………つつ……………ああ……………ッ!!」

慌てて怪我人達の元に戻つてみれば、川から引き上げた2人の内の1人が目を覚まし何かに怯えた様子で体を引き摺りながら後ずさつていた。

「……………だまう……………ここにもこだまがいるのか」

必死で何かを指差す男の視線を辿つてみれば、そこにはふるさともよく見た小さな人型の精霊——こだまがいた。

そして故郷のこだまと同じく、ぜんまい仕掛けのオモチャのように頭を振動させてカタカタと鳴らしていた。

「静かに、あまり動くと傷に障る。それに好きにさせておけば悪さはしない。森が豊かな印だ」

男の悲鳴で何か獣でも現れたのかと思ひ慌てて戻ったが、悲鳴の原因がこだまに驚いただけと分かった俺は歯をガチガチ言わせてこだまにビビりまくる男を宥める。

「こいつらシシ神を呼ぶんだ……」

「シシ神？デカイ山犬の事か？」

「違う!!もつと恐ろしい化物の親玉だ。ああああ!?消え——ヒイヒイッ!!」

さっきの山犬が主じゃないのか。あれ以上に高位の存在がいるとか恐ろしい場所だ。

先ほどの山犬はまだ序の口だと言つてのける男の返事に、俺はシシ神の森に対する認識を改める。

「だから騒ぐな、ヤツクルも平気でいる。シシ神がどんな化物かは知らんが近くに危険なモノはいないはずだ」

すうつと消えるように姿を消したこだまが瞬間移動してまた現れたり、こだまの仲間がぞくぞくと集まってきたりする中で男に危険は無いと告げ、これ以上怪我の身で騒ぎ立てないように落ち着かせる。

「すまんが、この後お前達の森を通らさせてもらうぞ」

そして、ヤツクルの背の上に現れたこだまに近付いて言葉を掛けた。

「とりあえず怪我の手当てだな」

恥ずかしがるようにくるりと背を向けてから消えたこだまの姿を見送り、怪我の男に
向き直った俺はそう言つて男達の手当てと周辺の搜索を再開するのであった。

「ふう……ッ」

中々に堪える……ッ。

怪我人2人の手当てをした後、少し下流の方を搜索して新たに2名の負傷者を回収し
た俺は最初に見つけた重症の男を背負いながら険しい山を多くのこだま達に囲まれつ
つ徒歩で進んでいた。

「すまねえ、本当に何から何まですまねえ。荷物まで置き去りにさせちまつて」

「怪我の手当て、それに兄と私の代わりに弟を、雅矢を運んで下さり……このご恩は決して
忘れません」

「気にしないでくれ、困った時はお互い様だ」

馬の太郎と次郎に跨がりしきりに感謝の言葉を述べてくる2人——後から下流で助
けた一矢と勇矢の兄弟に言葉を返しながら歩を進める。

ちなみに背負っている重症の男も一矢と勇矢の兄弟であり、雅矢と言うらしい。

「だ、旦那あ……戻りましょうよ、向こう岸なら道があります。この森を抜けるなんて無茶だ」

脚や腰を負傷し自分で歩く事が困難な長男の一矢と次男の勇矢の2人が三男である雅矢を背負い山を進む俺に繰り返し頭を下げる一方で救助した4人の内の最後の1人、ヤツクルに騎乗している男——甲六が辺りをキョロキョロと見渡しながら情けない声を出して引き返すように懇願してくる。

「甲六テメエ!! 雅矢がどうなつてもいいつてののか!？」

「ヒイイイイツ!! で、でもよ!! 石火矢衆のアンタらもこの森の恐ろしさは知ってるだろう!？」

「タタラ場に戻つたら甲六にも”お礼”をしないとイケませんね」

「ヒイツ!？」

迂回路を通り安全を優先しようと言う甲六に対し、末の弟が重症で一刻も早く根城に戻る事を望んでいる一矢と勇矢の2人が甲六を睨み脅しをかける。

「余裕があればそうしたい所だが川は流れが強すぎて渡れないし、それに（ヒイ婆謹製の）薬を飲ませたから暫くは大丈夫だとはいえ、薬の効果が切れた時の事を考えたらタタラ場に急がないといかん。諦めてくれ」

血の匂いに釣られて獣がやって来ないとも限らんしな。

「チラリと後ろを振り返り、4人の体から滲む血に視線を注ぐ。

「それにしても……道案内してくれているのか、迷いこませようとしているのか分からんな」

兄弟の射殺するような視線を浴びまくり竦み上がる甲六の姿に苦笑しながら視線を前に戻し、常に3歩先をトテトテと進むこだまの後ろ姿にもう一度苦笑を漏らして大人しくこだまの後に続いて一步一步山を登っていく。

「ハア……ハア……」

流石にキツイな……。

「旦那あ、コイツら俺達を帰さないつもりですよ。どんどん増えてやすぜ」

「クソツ、薄気味悪いな」

「何のために集まって来ているんでしょうか？」

「……」

そのまま暫く進んでいたが、流石に成人男性1人を担ぎ上げながら山中の道なき道を進んでいくのはこたえ、甲六達の言葉にも返事を返す事が出来なくなってくる。

「ハハツ……」

「応援してくれているのか、嘲笑っているのか。まあ、応援してくれているのだと思う。」

途中少しばかり斜面に手を付いて呼吸を整えていると、怪我人を背負う俺の真似でもしているのかこだまをおぶったこだまが次々と俺の横を通っていく。

その微笑ましい姿に元気をもらい再び歩みを進める。

「ふう……うん？お前達のお母さんか？立派だな」

こだま達の応援を受けながら進んでいると大量のこだまが引つ付いている荘厳な大樹に出くわした。

前世で見た事がある屋久島の縄文杉のように立派で神々しささえ存在している立派な樹形に少しばかり見とれる。

さて、行くか。……いや、ちよつと待てよ。

「甲六、ヤツクルの左後ろ足辺りにある瓢箪を取ってくれ」

「へ、へい」

束の間の休憩を挟み再び歩きだそうとした俺だったが、ちようどいいモノを持つている事を思い出し甲六に声を掛ける。

折れていない方の左手で掴み取った瓢箪を差し出した甲六に礼を言って受け取り、そのままその瓢箪をこだま達の母親の根元に置き一礼し歩き出す。

「だ、旦那？まさかとは思いますが今この瓢箪つてもしかして……」

「酒だよ。お供え物にな」

俺の行動を見ていた甲六が恐る恐るという感じで問い掛けてきたので、言葉少なくそう答える。

「も、勿体ないですよ旦那ああ!!」

瓢箪の中身が酒だと知った途端に騒ぎ出した甲六にやっぱり騒ぎ出したと思いがながら無視を決め込み、俺は先を急ぐのであった。

閑話 ヤンデレ出陣

アシタカを村から放逐し半年。

エミシの村にある社では嘗てのように——アシタカに沙汰を告げた時のように重く苦しい雰囲気が漂っていた。

「「「……………」」」

「はあ……………」

村長衆の面々が思い詰めた表情で顔に影を落とし、巫女であるヒイ様がため息を吐きながら呆れ顔で石を弾き呪（まじな）いを行う。

「……………」

ただ以前の状況と違うのはアシタカが居た場所に、顔をパンパンに腫れ上がらせ青タンを幾つも作り、所々に巻いた包帯に血を滲ませ、小さなうめき声を上げながら横たわる次期村長候補——アシタカの後任にあたる男が居る事であった。

「……………」

「ヒイ様……………」

「結果は、結果はいががでしたか？」

石を弾くのを止め僅かに天を仰いだ後、何度目かのため息を吐いたヒイ様に村長衆が声を掛けた。

「少なくとももうこの近辺には居ないようだ。私達の手を離れて自由の身となったと呪いで出たよ」

「やはり……」

「遅かったか……」

「手遅れならば追跡——ゴホン、捜索隊は引き上げさせるしかあるまいか」

ヒイ様の言葉に落胆した様子で互いの顔を見合わせる村長衆の面々。

「全く……あれから半年。ようやく皆落ち着いてきたというのに厄介な事をしてくれたねえ」

そんな男達をよそ目にヒイ様は眼前に横たわる男を感情の無い瞳で睨みつけ呟く。

「も、申し訳……うう……」

軽蔑と失望が入り交じる侮蔑の視線を浴び、男は縮み上がりながら言葉にならない声を漏らした。

「お前が嫌がるカヤを無理矢理手籠めにしようと思えなければこんな事にはならなかったものを」

「全く。アシタカに続いてカヤまで失う事になろうとは……此度の始末はどうするつも

りだ」

「そもそもカヤはヒイ様の跡を継ぎ村を導く巫女となる事があの一件の後に決まっていただろうに、何故こんな事をしたのだ」

「うう」

怪我で息も絶え絶えな事など知ったことかとばかりに周りから次々に飛んでくる叱責にうめき声を上げるだけの男。

「さてはて、どうしたものだろわかね」

そんな哀れで愚かな男から視線を外し、最側近である村長衆の数人と膝を突き合わせながら密談を始めるヒイ様。

「カヤはもう村には戻らないのでしょうか？」

「いや、全てはあの娘の選んだ道次第。良き方に転べば自らが最も欲した物を得て華々しく凱旋、良くない方に転べば最も欲した物の一部だけを得て消え去る」

「最も欲した」

「物を……」

ヒイ様が導き出したカヤの進退に対しての呪いの結果に村長衆は互いに視線をぶつかけ合う。

「それはつまり……」

「アシタカだろう」

「やはりか……」

「アシタカがおらんってからのカヤの奇行の数々……あれは見ておれなかった」

「まさかとは思いますが、此度の一件カヤが？」

「ないとは言い切れぬのう、何せ手際が良すぎる」

「後腐れなく出ていく為にあやつに自分自身を襲わせたと？」

「……あり得るな」

言葉を積み合わせて行くうちに何故か楽しい表情を浮かべて出歯亀精神丸出しでヒートアップしていく村長衆数人。

「こうなってくると結果が楽しみじゃ」

「全く。しかし、アシタカはあれでモテるからのう。カヤが見付けた際に別のおなごと一緒にあったりなんてしたら……グフフ」

「この目で見たかったのう……修羅場」

「あやつも案外スケコマシじゃからな、呪いなんぞ片手間に片付けて別のおなごも一緒に連れ帰ってくるやもしれぬぞ」

先程までとは一転して和気あいあいと言葉を交わす長達。

「まあアシタカのことじゃ、なんとかするじやろう」

「うむうむ。しかし……何はともあれ」

「「アシタカも大変じゃ」」

皆、思う事は同じなのか遠い目で彼の者へ思いを馳せたのであった。

「えーつと、こつちかな？ 兄様に続く道は」

「フッフ驚くだろうなあ、兄様」

「会えたら兄様嬉し泣きしてくれるかなあ……」

「半年以上会ってないし、ギョツと抱き締めてくれちゃったりして」

「でも心配だなあ……」

「呪いで占つたら兄様の周りに薄汚い牝犬と穢らわしい雌狐が擦り寄るだろうって出したし」

「他にも有象無象のゴミ虫共も集るだろうって」

「でもでも大丈夫だよね？ 私の小刀と一緒になんだし」

「それに私に会えないからって例え気の迷いをおこしていても私が目を覚まさせてあげればいいだけだし……」

「フフフツ、待っていてね兄様。すぐにカヤが参りますからね」

「フフツフフツ、フフフフフ……」